

むかしけさあたんちゃんな

むかし、ある村で、毎晩、山奥から女の声が聞こえました。それは、

「連れに來いー、連れに來いー」と聞こえました。村の人たちは、

「あれはなんだろう」と、大さわぎを始めました。そのうち、

「あの声を確かめて来た者には、ほうびをやることにしよう」という話になりました。

村に、貧乏なふたりの兄弟がいました。ふたりは、

「おれたちで、あの声を確かめて来よう」と相談しました。そして、はじめに、兄が出發して行きました。

山の中へ入って行くと、

「連れに來いー、連れに來いー」と聞こえて来ました。兄は、

「連れて行こー」とさげびました。すると、また、

「連れに來いー、連れに來いー」といって、その声がだんだん近づいて来ました。やがて、兄のすぐそばで、

「連れに來いー」といいました。兄は、もうおそろしくて、ほうびも何もいらなと思つて、走って逃げて帰りました。

あくる日、こんどは、弟が、

「おれが行つて来る」といって、出かけました。

山の中へ入って行くと、

「連れに來いー、連れに來いー」と聞こえて来ました。弟は、

「連れて行こー」とさげびました。すると、また、

「連れに來いー、連れに來いー」といって、その声がだんだん近づいて来ました。やがて、弟のすぐそばで、

「連れに來いー」といいました。弟は、

「連れて行こー」とさげびました。すると、たいそう美しい女が、死んだ人を背負つてそこに立っていました。弟が、

「あんたは、どうして、毎晩、『連れに來い』っていうんですか」とたずねると、女は、

「わたしは、母親が死んだのにまだ葬式をしていなくてね。だれか勇気のある男の人はいないかと思つて、『連れに來い』とよんでいたんですよ。お礼はしますから、どうか母親の葬式を出すのを手伝つてくださいますか」といいました。弟は、

「ああ、それならたやすいことですよ」といいました。

「そうしてくださるなら、母親を背負つてくださいな」

「じゃあ、背負いましょう」

弟は、死んだ人を背負つて、背中にくりつけました。女は、弟に灯りをわたして、

「さあ、あなたが先になつてください」といいました。弟が、

「どこへ」と聞くと、女は、

「そっち、そっち」と教えながら、弟の後ろからついて来ました。

ふたりは、いろいろな話をしながら、ずうっと歩いて行きました。ふと話がとぎれたので、ふり向くと、女はいなくなっていました。

「これは、やっかいなことになった。死人は背負っているし、どうしたらいいだろう」
弟は、道も分からず、木ややぶの間を、あっちひっかかり、こっちひっかかりしながら、歩いて行きました。ようやく朝になったので、弟は高い木に登って、あたりを見回しました。すると、遠くに自分の村が見えたので、ほっとして帰って行きました。

「兄さん、兄さん。おれ、死人を背負わされたんだ。そして、ひと晩じゅう、山の中を歩きまわって、くたびれはてしまったよ」

弟は、そういうなり、背中の死人もろとも、ふとんにもぐりこんでしまいました。

ずいぶんたって、弟が起き上がってみると、体がとても軽くなりました。よく見ると、ふとんの中に、黄金のかたまりが落ちていました。兄弟はよろこんで、金持ちになつて幸せに暮らしたそうです。

やっぱり勇気のある人には、かなわないということです。

にや、がっさ

原話…『久永ナオマツ姫の昔話 奄美大島』稲田浩二監修／日本放送出版協会
再話…村上郁